

地域課題解決に資するコミュニティカフェのデザイン

1 目的・概要

みなさんは、「コミュニティカフェ」というものをご存じでしょうか。

コミュニティカフェ（以下CCと表記）とは、誰もが気軽に、かつ安価で利用できる「まちの居場所」であり、近年その存在が注目されています。しかし、非営利であるがゆえに変革が少なく、また継続的な運営が難しいことも課題に挙げられます。

このプロジェクトでは、現場のCCの声を聞いた上で、各種文献・統計データや地域住民との対話を通して地域の「課題」を発見し、それを解決するイノベティブなCCを、自分たちの手でデザインすることを目的としています。



Annual Schedule

2019年

4月～6月 現状分析・理想のCCのデザイン
7月 プレCC「カフェしゅみた」「Boku Labo」の準備・開催

9月～10月 地域課題調査

11月 CC「Oyako.com」の準備

12月 CC「Oyako.com」の開催

2020年 1月 理想とするCCの具現化



2 成果達成度

春学期

春学期は2班に分かれ、参加者体験型のプレCCを開催しました。

カフェしゅみた

「地域で暮らす高齢者のつながりづくり」と「趣味を通した生きがいの発見」をコンセプトとしたCCです。このCCの名称は「多趣味」という言葉をモチーフにしています。

内容としては、参加者の新たな趣味を創出する「この指とまれ」とお互いの趣味を共有することで、今後の趣味仲間を作る「しゅみたの窓口」の2点が挙げられます。

今回は「コーヒー」をテーマとし、本学の珈琲同好会のメンバーを招き、本格的なイベントとなるように工夫しました。参加者の方には実際にコーヒードリップを体験していただいたほか、コーヒーに関するクイズの出題や参加者・スタッフ間でお互いに趣味について話す時間を通し、充実した時間を提供することができました。参加者の方のアンケートからは、企画の充実性や接客態度の良さを評価するコメントをいただきました。

Boku Labo

「小学生の余暇支援・サードプレイスづくり」をコンセプトとしたCCです。このCCの名称は「ぼくらの研究所」をモチーフにしています。

内容としては、小学生の学習に対する興味を促進すること、そして余暇時間を楽しく過ごしてもらうことの2点が挙げられます。

今回は「科学実験」をテーマとし、スライムやドライアイスを用いた実験を参加者とともに行いました。その際、ただ実験をして「楽しい」だけで終わるのではなく、「なぜそうなるのか」を小学生にもわかりやすく伝えるため、絵や図の活用や言葉遣いなど工夫を凝らしました。直前の広報にもかかわらず目標人数を上回る参加者に来ていただき、アンケートからは「楽しかった」「次もぜひ来たい」という声を多くいただきました。

秋学期

春学期の反省や気付きを活かし、さらに文献購読や現地調査をしたうえで自分たちの理想とするCCをデザインしました。

Oyako.com

「親子のコミュニケーション促進」「子どものサードプレイスづくり」をモチーフとしたCCです。このCCの名称は、「親子のコミュニケーション」をモチーフとしています。

春学期の「Boku Labo」では、初対面の子ども同士の関わりはあるものの、親同士や親と子の関わりは少なく感じました。ここで親子のコミュニケーションについてさらに調査したところ、全国的にも、また上京区においても、親と子の過ごす時間が短いことが判明しました。また、子どもとしても、普段放課後の時間を過ごすことのできる場所が少ないことが判明しました。そこで私たちは、普段あまり話すことのない親子を対象に、積極的に会話を促進し、安心して過ごしてもらう場所をデザインすることに





しました。

今回は「ボードゲーム」をテーマとし、様々な知育系ボードゲームを参加者楽しんでいただきました。また休憩時間には、春学期の「カフェしゅみた」の経験からコーヒーを親に、秋学期に地域交流の一環で参加した「東九条マダン」という地域イベントの経験から風船やシャボン玉を子どもに提供することで、親同士、子同士の交流も図りました。さらに参加者にはインスタントカメラ「チェキ」で撮影した写真を提供することで、思い出作りの場としました。

こうしたカフェを12月の毎週日曜日に計3回行いました。こうすることで各回の反省を次に生かし、より洗練された持続可能なモデルの構築が可能となりました。

はじめは参加者同士の交流があまり生まれなかったものの、各回の後半には親子間だけでなく、初対面の親同士においてもコミュニケーションが生じていました。

3 プロジェクトを通じて

当初はCCという言葉すら知らなかった私たちは、このプロジェクトを通して、CCについての知識を深めるだけでなく、様々な潜在的な地域課題に目を向けるきっかけとなりました。しかしすべてが順風満帆に行っただけではありません。数ある課題を解決するために自分たちに提案できるCCは何か、理想と現実のジレンマに苦しんだ時期もありました。また運営面においても、全員の予定が合わず、共有不足が原因で意見のズレが生じることもありました。しかし、私たちは今回のプロジェクトを通して、「答えのない問い」に対して、自らが仮説を立て、検証する力を大きく伸ばせたのではないかと考えます。



今回のCCを今後も私たちが継続的に実施することは、1年間のプロジェクトという特性上困難ではあります。しかし私たちの中で構築したこのCCモデルは、あと一步の工夫次第で社会に十分通用するものであると考えます。そうしたモデルを構築できたこと自体を誇りに、今後機会があれば必ず実際のCCに提案し、運営したいと考えています。



編集後記

この1年間を思い返してみると、日々葛藤の連続でした。企画書を何度も突き返されたり、企画自体がなかなか定まらなかったりと苦勞の連続でした。しかし、自分と異なる様々な学部メンバーと互いに協力し合うことで、自分に知らない多様な意見を取り入れながらプロジェクトを無事完遂することができました。日々支えてくださった先生方、SAの上林さん、そして頼りになるプロジェクトメンバーのみんな、本当にありがとうございました。

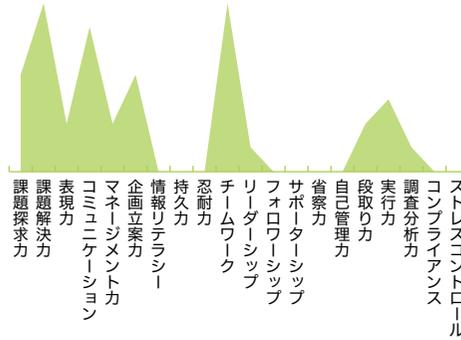
プロジェクトメンバー

佐竹 真生子(文4) 堀 草代香(文3) 岡田 萌伽(文3) 大門 美鶴希(社会4) 濱本 歩実(社会3)
前川 奈々(社会3) 森若 優衣(社会3) 吉井 友菜(社会2) 木俣 智也(法3) 大村 有里依(経済2)
中野 慎一郎(政策2) 秋山 阿耶佳(グローバル地域文化3)

プロジェクト活動 アンケート集計結果

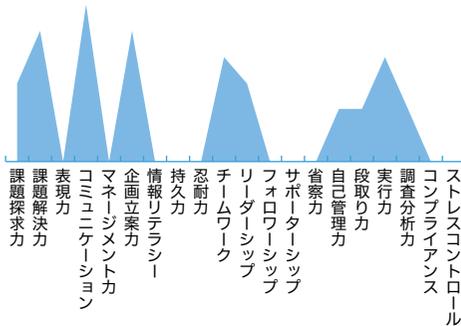
授業開始時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

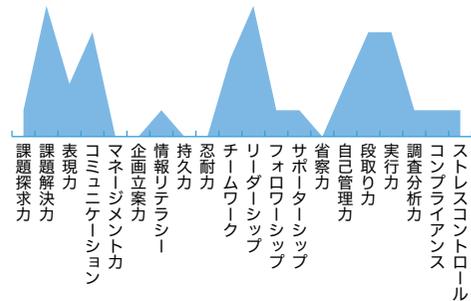


春学期終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい

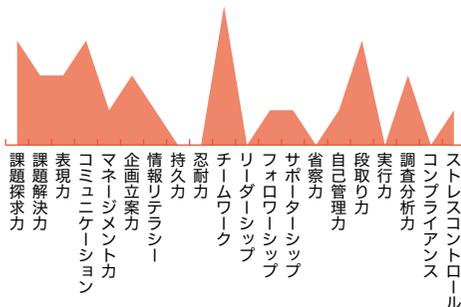


Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい



授業終了時

Q1 チームとしてのプロジェクト活動に「必要と思われる要素」を選んで下さい



Q2 プロジェクト活動を通して実際にあなたが「身についたと思う要素」を選んで下さい

